

【授乳関係における理想化と侮蔑】－乳房の脱価値化をめぐる－ (1987)

Lynda Miller

[※原題; Idealization and Contempt : Dual Aspects of the Process of Devaluation of the Breast in a Feeding Relationship]

私は当時、私の臨床トレーニングの前段階に必須とされた母親と子どもの観察に臨んだわけですが、それらの記録をざっと読み直しながら、その体験を振り返りますと、それはこの論文のタイトルに掲げられたテーマ性に総括されると言えます。それは皮肉 ironic にも覚えますし、また幾分か悲しい気持ちを認めざるを得ません。私が味わった、それらアイロニーやら悲哀感と申しますのは、母親が母乳での子育てを過大に理想化しているのとは対照的に、赤ちゃんにとっての母親の乳房は脱価値化され、時には侮蔑されるに至ったという、それもどちらかという意識的ではなく無意識的なプロセスでしたわけですが、そうした両者の著しい差異にありました。

私は、この母親ジェニーを彼女の赤ん坊アンナとともに2年間に亘って、毎週一回定期的に訪問し、その後も引き続き、不定期ながら彼らを訪問し、観察してまいりました。アンナが誕生した当時、ジェニーと彼女のボーイフレンドのマイケルは、どちらもオーストラリア人ですが、何人かの仲間たちと同居して‘コミュニティ’を形成し、ほぼ放置されていた敷地の大きな建物を住まいとしておりました。その建物でこのカップルがシェアしていた部屋は、色彩の明るいペイントで塗られ、居心地良い空間になっておりました。そして彼らは親になろうとしていた時点で、彼らの最初の子どもは極力医学的な介入を避け、自宅出産をすることを断固決めていたのです。

私が最初にジェニーとマイケルと会ったとき、彼らは子育てというものについての彼らの見解を大いに力説しました。彼らはどちらもとても頑迷ともいえるほどに、いわゆる慣習とか伝統によらないイデオロギーに固執しているようでありました。或る種の考えやら実践は良しとされ、他のは極端に悪と見做されておりました。その例を一つ挙げますと、ジェニーは、病院での出産は赤ちゃんにとって心的外傷を受け、心身に異常を来すと思いついていたのです。そして彼女は、ずうっと誕生後の赤ちゃんを自分のからだから離さず、いつもすぐ脇に抱えているつもりでいると語り、従ってそれが私の観察にいくらか妨げになるかもしれないと警告しました。彼女はまたしばしば、自らが擁護するところの‘菜食主義’ダイエットにも言及しました。即ち、彼女は‘清浄 pure’と感じるところのごく限られた健康食品しか取らないということであり、それらはわれわれ大概の現代人が食する‘汚染された’食品とは対極にあるという話でありました。特に、動物性のもを指しています。

アンナは、こうした両親の希望に沿って、親しい友人らに囲まれて自宅出産で誕生したというわけですが、ジェニーは支えられ、しゃがんだ恰好で出産に臨み、7時間経て分娩後アンナは温かいお湯の中へと運ばれ、そしてジェニーの言葉を借りますと、<湯舟に横たわって微笑を浮かべ、周りを見渡して

いた>とのことであります。ジェニーはいかにも勝ち誇ったように、薬物など一切要らなかったということを報告しました。それに、医者との間で、もしも胎盤を除去するのに薬を使うならば一戦交えずにいられなかっただろうが、それも必要ではなく、ごくごく自然に片付いたというわけであります。

どうやらジェニーが擁護するところの、この‘反伝統的なイデオロギー’の最大の意義というのは、乳房はすべてアンナのニーズに見合ったものとして提供されるべきであり、母子の一体となる至福を維持するためにあるというジェニーの信念にあります。そうすれば、恰も出産という‘分離の作業’が無効化できるとでもいうように聞えました。従って、乳房は常時、昼でも夜でも、アンナに与えられておりました。そして彼女は3歳半になるまでは完全に離乳されることはありませんでした。‘欲しがるときにお乳を与える demand feeding’という一般によく聞かれる言葉はここでは当たりません。なぜならジェニーはアンナがちょっとでもむずかかったりすれば、それが赤ちゃんの心のうちで欲しがっているものとは全然違っているときですら、すぐさまオッパイを彼女に与えたのですから。。。

ここで観察記録から抜粋したものをご覧いただくことに致しましょう。それが、この授乳をめぐる母子関係の性質の特徴をいくらか例証していると思われれます。特に母親が赤ん坊との‘理想化された共生的な融合 an idealized symbiotic fusion’を得ようと懸命になっているさまが詳細に示されていると思われれます。まずはアンナの誕生以降の、ごく初期の観察記録の抜粋から始めましょう。

アンナは誕生後の13日目であります。ジェニーは殆ど1時間ごとにおっぱいをあげ、それも毎回必ずどちらか一方のオッパイをあげるだけということに決めていました。それは、ジェニーの言葉を借りるならば、<吸うことのごく自然な流れとリズムを壊さないために。。>ということなのであります。

赤ん坊はジェニーの腕のなかに抱えられ、とてもリラックスしているように見えた。。彼女の顔は徐々に赤くなり、膨らんでゆく。おっぱいを吸いながら、目は幾らか閉じられてはいるものの完全にというわけではない。彼女は、上向きに、もしくはオッパイに向かってジッと目を凝らしているようだったが、ジェニーの顔には目は注がれていない。ジェニーは全然話し掛けることはしない。。この間ずっとただ熱心に赤ん坊に見入っていた。或る時点で、赤ん坊は<ああ>と柔らかな溜め息のような音を発する。するとジェニーがこれに呼応する。

同じ観察日ですが、この後に一つの方だけのオッパイで授乳を済ませたあと、アンナはジェニーの膝の上に横たわり、ジッと母親の顔を見上げていました：

赤ちゃんが少し音を発した。ジェニーは彼女を優しく揺らし、時には彼女に呼応するかたちで、<ああ>ととても柔らかな声を出す。赤ちゃんは、ハーハーと喘いだかと思うと、突如大きな泣き声をあげた。ジェニーは<もとおっぱいが欲しいの？>と言い、スウェーターをまくりあげて、もう一つの方のオッパイを含ませた。赤ちゃんはそれを意欲的に食いつき、熱心に吸い、そのままとてもじっと飲み続

けていた。2,3分後、赤ちゃんはもはや吸っているようすではない。しかし彼女の口の中には乳首は
唾えられたままである。

ジェニーにはオッパイを毎回片方だけを与えるといった固定観念があったにも関わらず、どうにかこの
辺りで彼女は受容的となり、赤ちゃんのコミュニケーションから学ぶことで融通を利かしたようで、これ以
降、どちらのオッパイも続けて与えるふうになってゆきます。こうして、アンナの誕生後の最初の数週間、
ジェニーはまったく疲労困憊していたはずなのですが、まったくのところ赤ちゃんに気持ちが奪われており、
いかなる分離の感覚によっても打ち碎かれることなく、アンナとの‘一体感’を大いに堪能していたもの
と思われまます。

アンナが23日目になった頃、次に掲げます記録にも観察されるように、この授乳関係における和
合した性質 the harmonious quality がひどく危殆に瀕しているといった印象が既に覗われます：

アンナがちょっと泣き声をあげ始めた。小さく＜ああ＞の音を発した。幾分とても深い、しっかりした
音である。ジェニーは、先週彼女の母親が訪ねてきて、いろいろと‘神経に触る’ことを言ったからイラ
イラさせられたということに触れて、だから赤ちゃんがそうした彼女の気分を察したに違いないというこ
とを私に語る。アンナは徐々にむずかかって、声を荒げた。足を力強く蹴り、そしてこぶしを握りしめている。
ジェニーは、＜不機嫌なママだったわね？ そうよね。それで、何欲しいっていうわけ？ またお乳なの？
＞と彼女に言い、服のボタンを外す。するとアンナはすぐに頭を乳首の方へと向け、力強く吸い付く。
最初ちょっと喘いで、吸いながらも微かに音を発している。アンナは突然乳首を離し、グイと乳房か
ら顔を背ける。ジェニーが彼女を抱き上げ、からだの向きを替えてから、もう一つ別のオッパイを与え
る。するとまずアンナははっきりとそれから顔を遠ざけた。だがジェニーが指先で乳首を支えてやると、
彼女はまた乳首を咥えた。アンナは力強く吸っていた。時折唇でキスをするような音を立てている。
彼女の頬はますます赤味を増し、そして膨らんでゆく。そして彼女の眼は薄ぼんやりとしたり、パツ
と輝いたりする。それから数分ほど吸って後、アンナは頭を左右に揺らし始めた。微かながら素早い動
作が繰り返される。よくは見えなかったが、彼女の口は交互に乳首にくっいたり離れたりしてると
うだ。ジェニーは＜これって、何かゲームなの？＞と尋ねた。しかしながら彼女がオッパイをアンナから
引き離そうとした途端、彼女は尚も大きな泣き声をあげる。アンナはどンドン落ち着かなくなる。足
蹴りを激しくして、腕を上下にバタバタさせる。とぎれとぎれに頭を左右へと揺さぶる。ジェニーが＜も
う十分飲んだのね＞と訊く。だがアンナは尚も泣き喚く。オッパイを欲しがっているとも言えない。だが
手放すこともままならないようであった。繰り返しそれに向かって吸い付いたり、離れたりする。ジェ
ニーは、＜こういうのって最悪だわね。この子が何を欲しがっているのか分からない。自分だけの世界に
居るみたい。それでオッパイを飲み終えるとカナキリ声を上げるんだもの…＞と私に愚痴る。

どうやらこの母子間に、気持ちの行き違いが生じてき始めてるようです。最初の数ヶ月間に亘る一
連の観察から、一つのパターンが見え始めました。アンナはオッパイを与えられたとき、それを必ずしも

吸いたいと思っていない場合でも、それに吸い付き、そしてまたそれを遠ざけて離れるといったことを繰り返したのであります。アンナの‘オッパイ経験’は、明らかにジェニーの懐くところの‘理想化 idealization’に常に合致しているとは限りません。それどころか、そのアンビヴァレンスゆえに、まるで‘オッパイはいかなる痛苦の感情をも癒すことができる’>といった母親の信念に挑戦しているかのようでありました。

メラニー・クラインの著書『羨望と感謝』(1957)において、‘良き対象 a good object’と‘理想化された対象 an idealized object’とは相異なる点でその重要性が強調されております。これらの区別は決して絶対的なものではありませんが、彼女に依りますと、《こうした2つの対象の側面の深刻な分裂 split は、良き対象と悪しき対象とが別々にされているのではなく、理想化された対象と極度に悪しき対象とが区別されていることを示唆している。それらが厳然と区別されているのは、破壊的衝動、羨望そして迫害的不安が苛烈で、したがって理想化がこれらの情動に対して防衛として機能していることを示している》こととなります。そうした分裂 split が過剰でない場合には、健全な発達に必要とされる自我統合 ego integration と対象総合 objects synthesis のプロセスは機能し、良き対象との同一視が達成されることになりましょう。

上記に述べられた観察の雰囲気から察しますと、そこにどうやら強い迫害的要素が覗われます。特にアンナが授乳を終えた後にカナキリ声をあげることに例証されているようであります。Mrs. クラインの見解(1957)では、《過剰な理想化は、迫害 persecution が主要な動因であることを意味する。…理想化は迫害的不安の必然的な産物であり、それへの防衛なのです。さらには‘理想化されたオッパイ the ideal breast’とは‘貪りくらうオッパイ the devouring breast’の対照物 counterpart と言えなくもない…》ということになります。

さらには、アンナがオッパイに吸い付くやら離れるやらを繰り返す、その苛立った落ち着きのない反復的なマナーは、或る種の混乱した心の状態を示唆しております。それは、‘良きもの goodness’と‘悪しきもの badness’とを区別するところの能力へと導かれる発達のな分裂 splitting の典型とは言えません。この赤ちゃんの混乱は、おそらく母親の心の状態に投影同一視している点から理解されましょう。ジェニーの過剰なる分裂 splitting の傾向は、これまでも語ってきましたが、彼女の生活の多くの面で、特に食べ物ですが、はっきりと覗われます。Mrs. クライン(1957)は、良き対象を保有することの能力の欠如についても語っておりますが、それは‘理想化’という手段によって対処される場合があるのです。<…それはまた、良きものと悪しきものとの混乱にも絡んでおり、原初対象 the primal object との関係性において生ずる>と…。さらに彼女は「脚注」に次のように書き加えております。<母親・赤ちゃんとの関係性が特に理想化されているという場合には—これらの人々はそうした関係性に十分な幸福感 happiness を味わうことの無い人々なのです>と…。これは、この母親ジェニーについても言えるかと思われまふ。赤ちゃんについていえば、彼女は母親の‘オッパイの理想化’とどうやら結託しているようであります。それがために、対象の強烈な迫害的側面が彼女にとって経験されがちになると言えそうです。それは特に、ジェニーの語るところから察しますと、夜間にであります。

誕生後、アンナはいつも両親のベッドと一緒に眠っております。夜間にしばしば彼女は目覚めることがあり、ジェニーはいつも彼女をなだめるのにおっぱいを与えていたこととなります。大概のところ、それで静かになり、又寝入るのですが、時としてはオッパイを拒絶し、とどまることなく夜泣きが続くことがある、とジェニーは私に語っております。

アンナが6週目のとき、ジェニーが昨晚起きたこととして私に語ったことなのですが、それは、両親のどちらかという‘感覚的、身体的なコンテインメント’へのこだわりが最もよく強調されていると私には思われました。或る晩、アンナは半時間ほど泣き叫びが止まらず、彼女とマイケルはやがて服をすべて脱いでアンナを彼らの裸でサンドウィッチにした恰好で‘しっかりと抱きかかえて’、それでどうにか彼女を宥めて落ち着かせてやったということでありました。

アンナが数ヶ月になった頃、建物の中の一つ小さな部屋が空きましたので、これが彼ら家族に割り当てられることになりました。母親と赤ちゃんは大きな部屋にあるベッドを使い、父親はその新しい部屋に夜寝るときだけ移ることになったのです。ジェニーとアンナとの身体的な密着さは、日中の殆ど保たれておりました。ジェニーは、アンナを小さな赤ちゃんのようにベビーホルダーに入れて胸に抱えていたからです。そして彼女が少々重くなったときには、バックパックに入れて背負っております。このように、母子の間での目と目のコンタクトはごく控え目でありました。

早期の何ヶ月かの間、アンナの顔にしばしば浮かぶ表情というのは、どちらかという眠たげで、ぼんやりとしたものでしかありません。彼女はジッと虚空を見つめていたりするだけで、殆どのところ直接的な目のコンタクトを求めようとせず、また反応することはありませんでした。アンナが1ヵ月半のなったときの観察は下記のようにありました：

私はアンナを膝の上に座らせていた。彼女は私の方へと振り向いて顔を見上げた。が、直接私の顔には向けられていない。彼女は私の指を軽く握っていて、その指先をリズムカルに動かしていた。彼女の目は左右に少し動いて、私の方へと焦点づけようとしたものの、どうやら私の眼そして顔は避けているように見受けられた。

この母子がそうであるように、殊に重要視されているのが身体的な抱っこ physical holding であり、心の中に抱きかかえられ、赤ちゃんを知ろうと欲するところの母親に見つめられたり話かけられたりといった経験には重きが置かれてない場合には、発達が或る側面において妨げられるということはあるに思われます。表面的な‘固着的 adhesive’な類いの同一視は、さまざまなものごとを発見したり、そしてそれが何かを知ろうとする意欲が育まれることへの必要条件の深まりを不可能にしかねません。‘固着的同一視 adhesive identification’においては、子どもは対象に直接触れているときだけ抱えられていると感じるのであります。こうしたことは、ある程度この母子に該当するものと考えられます。

エスタ・ビック(Esther Bick)は、彼女のよく知られた乳幼児観察の論文(1963)のなかで、母子が互いに関わり合う2つの異なったありようを指摘し、例証しております。その一つは主として視覚的かつ音声的なコミュニケーションであり、もう一つはどちらかという触覚的かつ運動感覚的なコミュニケーションが好まれるといったことであります。どちらの有り様にしてもコンテインメント及び成長にとって満足的な基礎を提供することは間違いなく、明らかにそのいずれものもがさまざまな程度に赤ちゃんの可能性を育むものとして基本的なものですし、それぞれが互いに他方を完全に排除するということではありませんでしょう。

ジェニーとアンナの場合、後者のコンテインメントの経験が口と乳首、皮膚と皮膚との接触といった不断の感触に重きが置かれておりますので、ジェニーにしてみれば、アンナを抱っこから降ろしたりしたならば、その途端に不安がって泣き喚くのは必至なわけですので、とても出来ることではなかったのです。下記の観察(アンナは1ヵ月半)では、ジェニーは授乳を終えて、アンナを腕の中に抱えていました。部屋のなかを歩き回り、彼女の背をとんとんと軽くたたいておりました：

アンナの頭は、ジェニーの肩越しにだらりと凭れかかっていた。そして彼女の瞼は伏し目がちとなって閉じられている。彼女は、それから目を開けようと努めるかのような動きをした。そうした動きを何度かして、それから彼女は眠りに落ちた。ジェニーは<あらまあ驚いた・・あと5分だけ待ってあげるわ>と言う。そしてとても優しく彼女を下へと降ろして、まずはその頭を床の上に置いてあったバスケットの中へとそっと押し入れた。下へと降ろされている間、突然アンナは両腕を突き出し、指を広げた。まるで落下の感覚を味わったかのようなのである。

たぶんアンナは、からだが母親のからだとの接触が途切れた瞬間、それまでの何ごとも無しに抱えられ安らいでいた感覚を失ったのでありましょう。

それから翌週、アンナが再びジェニーの腕の中で眠りに落ち、バスケットの中へと降ろされようとしていたときです：

アンナの眼は閉じたまま。が、彼女の息は大きくなり、すばやく握りこぶしを開いたり閉じたりした。頭がバスケットの底に触れたとき、彼女の眼は開き、小刻みに動いた。ジェニーは手をアンナの頭に置き、彼女の真上に屈み込んだ。アンナはジェニーを見上げて、少しぐずり声を上げた。数分後、ジェニーは手を引っ込めて、私に話しかけようとした。だがすぐさまアンナの眼は大きく見開いた。彼女は顔をクシャクシャに大きくしかめて、声を張り上げて泣き喚いた。

アンナは宥められそうになく、ジェニーがオッパイを与え、その乳首をアンナの口へと含ませようとしたが、彼女はそれを拒み、抵抗の叫びをあげております：

アンナの左手は乳首へと接近する。乳房を掴み取り、どうやら手のうちでつねってるふうにも見えた。それから彼女はそれを押しつけ、身をくねらせた。

Edna O' Shaughnessy (1964) は、ビオン (Bion) の着想を援用しながら、赤ちゃんとおっぱいとの関係性についての特徴を、おっぱいがアル (現前する) ときとナイ (不在である) ときを巡って描写しています。《子どもは空腹を覚え、おっぱいを必要としているとき、ニーズ (必要) が満たされていないということに気づく。この欲求不満、そして空腹の苦痛こそが子どもにとってはアルものであり、まず最初に、それは '悪いおっぱい' がアルとして感じられる》ことを、彼女は示唆しております。

おそらく、アンナにとって、おっぱいに焦点づけられた母親のからだのごく身近にあることはもはや絶対不可欠になっていた。なぜなら彼女は滅多なことでは欲求不満を味わさせられることはなかったのだし、それ故に '不在対象 absent object' に対処することも無しで済ませられていたのだから。時折ジェニーがアンナを一人で眠らせようとして寝かせた場合、'悪いおっぱい a bad breast の空想' が、実際におっぱいが再び現れたとき、それに投影されるということはあるでしょう。なぜならアンナには、この経験をメンタルなレベルで処理するといったすべが備わっていないのだから。ジェニーは欲求不満のサインが表れるやいなやすぐさまおっぱいを与えていたわけだし、アンナは事実として不在対象の経験を剥奪されていたわけであります。Mrs. O' Shagunessy の見解では、こうした状況は思考の発達 the development of thinking へと導くものではないということになります。

これに続く数ヶ月の間には、母子間の未分化で、共謀 (馴れ合った) 要素 collusive elements が減ってゆく様子が覗われました。そうした動きは幾分アンナによって先導されたものであります。その観察記録の抜粋は下記のとおりです (アンナ; 2ヶ月1週目):

アンナはわずかに音を発していたが、それは徐々に泣き声に近くなる。頭を後ろにのけぞり、腕を突き上げて振り回している。ジェニーはスウェーターをまくりあげ、<ほらほら、何が来るか分かってるでしょ? > と言って、彼女に乳房をあてがった。アンナは乳首のほうへと頭を向けなかったので、ジェニーがやさしくアンナをそこへと導いた。アンナは口に乳首を咥えたが、吸う動作をしているようには見えない。彼女の手はジェニーのスウェーターをいじくっている。

ジェニーはアンナに向かって、<おっぱいをただ感じていただけで、お乳が欲しいわけではないのね> と解釈してみせる。そして穏やかなふうで、<結局どうでもいいのよね。そうでしょ。もうどうでもね・・・ (You do' t care at all, do you? You don' t care) ・・・> と付け加えた。そして、その数分後のこと:

ジェニーはスウェーターをたくしあげて、乳房を与えた。<ほらね、ここにあるわよ> と言い、さらに <自分の指のほうがいいってわけじゃないでしょ、どうなの? > と訊く。アンナは握りこぶしを口のなかへと押し込もうとしているふうで、おっぱいを受け付けられないままにいる。

7ヶ月半になった頃、アンナはどうか一人で立ちがができるようになっております。この自立した動作に彼女は大いに勝ち誇ったふうにご満悦でした。ジェニーも大いに喜び、アンナを褒めております。彼らの交流においてどうやら固着的な趣きは減じてゆくようであり、アンナの自我統合の程度が増してゆく兆しがよりいっそう覗かれるようになってきました。

だが同時に、‘機嫌の悪い日 bad days’には、アンナの違った面が垣間見られました。或る日の観察では、ジェニーは特に疲れきって意気消沈しているように見え、その日はずっと彼女のベッドの上で過ごしていたのですが：

アンナはブラシで遊んでいる。静かに喃語を発しながら、時折私の方を見上げることがあった。ジェニーはアンナの後ろで背中を丸めて横になっていたが、すぐにも眠りに落ちてしまうふうであった。アンナは後ろを振り返ることもなしに、突然ブラシを落とした。そして後ろ側へと手を伸ばして、ジェニーに触れた。そしてからだのバランスを崩し、ジェニーの上へと倒れ込んでしまう。・・彼女はジェニーの鼻をひっつかみ、それを引っ張った。それから彼女の唇をもグイと掴んだ。その後にも、アンナは彼女の唇と鼻を再び掴みとろうとした。ジェニーは溜め息を付いて、〈お乳の時間というわけなの？〉と訊く。アンナはジェニーのブラウスを掴んで、ジェニーがボタンを外すやいなや、すぐさま彼女は乳首を掴みとり、それを口の中へと押し入れた。そして激しくかつゴクゴクと音を立てながら吸ってゆく。片方の自由な腕がもう一つ別のオッパイの方へと伸びてゆく。そしてジェニーがブラウスを大きく広げるや、アンナはもう一つの乳首をも手に取って、最初のオッパイを吸いながらも、それを指でいじくったり引っ張ったりをし続けた。

このような日には、アンナはどうか彼女自身と母親との境界にめぐる感覚 sense of boundary を失ったかのように見えます。こうした様態は投影同一視を示唆しているといえましょう。そこでは空想において自己のある部分が、もしかしたら自己の全体すらもが、分裂 split し、母親もしくは彼女の乳房に投影されるといったこととなります。さらにはジェニーの疲労困憊の状態とアンナの母親への要求がましさとの間には著しい相関性が認められます。アンナには、ひどく疲れている母親を気遣う能力 a capacity to spare の育っている形跡などはどうか皆無といえそうであります。アンナは、一見して消耗した母親などとも見るに耐えないといったふうに覗われます。これはおそらく、乳房を我が物とし、そして母親を吸い尽くして空っぽにし、それ故に彼女の消耗を来たしてしまったといった空想に起因しているのかも知れません。

Edna O' Shaughnessy (1964) は、《対象から分離することができないのは、それが外側にアルことで保証づけを得ることなしに、自分がただ一人で内側の損傷をきたした対象と共にいなくてはならないという恐怖に拠るのかも知れない》ということを示唆しております。ここでもそれが当て嵌まるとしたら、不安を取り除く自己保証のニーズがために、アンナは何度も何度も乳房へと舞い戻ることへ駆り立て

られることとなります。それがために、母親に休息を取らせて元気を回復させようといった気遣い(思い遣り)の能力 the capacity for concern を発達させることができないままでいるということになりましょう。

さらには、どうやらこの状況は、マイケルが、ジェニーを護り、娘との間に良き分離をもたらすように励みます、そうした厳格な父親的機能を提供することに一見して失敗しているということで問題を悪化させていたというのが私の印象であります。父親の積極的かつ能動的な関わりの無いことが、赤ちゃんを母親への執拗な侵入へと駆り立てるのを許していたのです。アンナにとって‘結合した対象 a combined object’を内在化する上で困難があるということは容易に推測できましょう。その欠如は、乳房との関係性において迫害的な不安感を煽ることになるものと考えられます。

アンナが9ヶ月半になったとき、ジェニーはしばしばアンナがしがみつき、始終まとわりつくことを嘆いております。下記の観察において、アンナは母親の脚を抱え込んでいました。そしてジェニーはあきらかにこれに苛立っています。そしていかにもうんざりした顔をして彼女はアンナを抱き上げ、膝に乗せてオッパイを与えたのであります：

アンナは数秒間オッパイを吸ったが、それからぐるっと向きを変えて、私の方を振り向きジッと見つめた。顔には微笑があった。それから乳房に戻り、そして乳首を親指と人差し指でつまもうとした。が、吸うには到っていない。微かに喃語を発し、落ち着きが無い。ジェニーはジャンパーを上げたり下ろしたりしながらオッパイを指し、<ほらほら、ここにあるでしょ>とか<あら、いなくなっちゃったわよ>と言う。アンナは彼女を眺めていた。微笑し、興味を持っているふうではあるが、積極的な反応はしない。

アンナにとって乳房をあらゆる不平不満の救済策として受容することに気が進まないのには、そこに幾らか‘抗議’の要素が混じっているからかも知れません。ジェニーにとってみれば、アンナがオッパイへの反応に熱狂 enthusiasm が欠けているのを拒絶として感じていたのかも知れない。つまりその拒絶とは、乳房を焦らし、挑発的な対象へと変える無意識的願望を刺戟しているわけでもあります。これに引き続き、次のような観察がありました：

ジェニーは再びアンナを床に置いた。彼女はジェニーに向かって、彼女の脚に再びびったりしがみついた。ジェニーは人形を拾い上げ、<たぶん、ルーシーがお乳を欲しがってるかな？>と言い、人形を自分の乳房へと押し当て、吸う音を鳴らした。アンナはあやふやな感じで微笑んだが、それから目を逸らした。

アンナは、いつも乳房への無制限の接近に慣らされてきました。ジェニーにとって授乳することが不都合である場合ですらもそうでした。(下記の観察のように、彼女が洗髪しているときがそうである。)彼女は、常にアンナの要求に諦めたふうな顔付きで屈するのであった：

彼女はワンワン泣き喚いて、ジェニーの脚にしがみついている。そしてジェニーは溜め息混じりに、
「オッパイ欲しいの？」と言う。アンナはジェニーのスウェーターを手に掴んで、その前の部分を引っ張り、Tシャツを覗かせ、それをぐいと引っ張る。乳房を探しているのだ。それがそこにあると認めたと
ころで、数秒して彼女はそれから向きを変え、興味を失う。そこにあったカップを拾い上げると、彼女
はそれをジェニーの口目掛けてぐいと押し付け、それから自分の唇にこすりつける。ジェニーは、
乳首を親指と人差し指の間に持ち、アンナに「どうなの、もう欲しくないってわけ？」と訊く。しか
しアンナは無頓着に構えて反応しない。カップと遊んでいる。喃語を声高に発しながら。。

Edna O' Shaughnessy(1964)は、次のように指摘しております。《子どもはいつも、ある部分
において、離乳されることを望んでいる》と。。そして、このような授乳に関わる二人にとって、離乳に伴
う避けがたい喪失感といった苦痛に直面するのに耐えられないのは母親の方なのか子どもなのか、ど
ちらなのかといった疑問が生ずるように私には思われました。互いの境界 boundaries がぼんやりとはっ
きりしないところでは、ジェニーかアンナのどちらかが分離 separation の方向へ向けて決定的な一歩を
踏み出すであろうことを想像するのはどうも難しいように思われた。

「抑うつ depression」を巡ってのクライン派の理論について、Diana Rosenbluth(1965)は、次
のような見解を述べております。《授乳し、抱えて慰めてくれる母親との密着した接触の喪失は、彼女
と‘一つであること oneness’、もしくはそれとの‘融合 fusion’といった自己愛的な幻想 the
narcissistic illusion が打ち碎かれることになる》と。。彼女はここでは赤ん坊の視点から語っている。
しかしながら、母親が適切に抑うつ態勢 the depressive position の葛藤をワーク・スルーしていな
い場合には、それらが自らの赤ちゃんとの関係性において鋭く再燃したとき、それに直面するのは大い
に厄介でありましょう。

Diana Rosenbluth(1965)は、‘融合状態’を自己愛的幻想として描写しておりますが、ジェ
ニーが永続させようとするところの「赤ちゃんと‘一つであること be one’の空想」はおそらく幻想として理
解されるのがよろしいでしょう。相互の投影同一視のかたちを取った或る隠れさたダイナミックな関係
性がそこには潜んでいると言っていいでしょう。Mrs. クライン(1957)は、迫害感に対する防衛としての
理想化、そして過剰な投影同一視との間に、何らかの意義深い繋がりと想定しております。そ
うしたプロセスは、自己の分裂した部分が対象へと投影され、「自己と対象との間の熾烈な混乱」を
導くものとなるわけですが、さらにはその混乱は自己そのものを表すに至るといえましょう。

11ヶ月目になった頃に、アンナは発達の或る側面において、どうにか自立の手段を得始めました。
嬉々として一人で歩き回ったり、他の子どもやら大人に対しても躊躇なく関わっております。しかしなが
ら、アンナが積極的な生き生きとした関心を周囲に向ける一方で、母親を誰かと共有するとか、乳房
の唯一の所有者としての自らの立場を断念するといったことは避けたいわけで、自然そうした事情が
絡むと何らかの葛藤を彼女の中に惹き起こしております。下記の観察は、幼い男の子と彼の母親が

訪ねてきていたときであります：

アンナは始終、ダニエルが手にしているものは何でも奪い取ろうと躍起になっている。彼女は立ち上がり、ダニエルの手にしている画用紙を引っ張った。彼は抵抗してキーキー悲鳴をあげた。すると、アンナは声を張り上げ、泣き喚いて、ジェニーの方へと振り向いた。彼女はダニエルの母親と話をしており、その時点ではまだアンナにオッパイをあげる気はなさそうであった。ジェニーは話を続ける。だがアンナは、彼女のスウェーターを力いっぱい引っ張り、泣いて訴え続けた。数分後に、ジェニーはスウェーターを持ち上げる。アンナはオッパイに食らい付いた。殆ど目を閉じ、吸うのに没頭しきっている。

この1週間後に私が訪問しますと、ジェニーがアンナを両腕に抱えたままで正面玄関の扉を開けてくれました。アンナは眠りながら、口には乳首を咥えています。ジェニーは注意深く上の階へとアンナを運んでゆき、ベッドの上に横にします。すぐさまに彼女は寝入ってしまい、私はベッドの傍らに腰掛けて、そうしたアンナを眺めていました。彼女は、この観察の間中、深い眠りに就いていたわけですが、尚も乳首は口の中に咥えられたままです。或る時点で彼女は眠りから目覚め、片腕をもう一つのオッパイを探すかのように伸ばします。彼女は唇で数秒間吸う動作をしますが、目覚めもせず、また乳首を離すこともありませんでした。

ここでアンナは、乳房を‘ダミー’として使っているかのようであります。慰めとしてなくてはならない源として…。彼女はまだ夜は母親と一緒に寝ております。そして両親は、アンナのために準備された別の部屋の装飾に忙しかったわけですが、彼女がはたして独りで眠ることに切り替え可能かどうか、想像することはいかにも難しく思われました。この家族の就寝時の決まりごとには、両親の境界の欠落が露呈しているといえましょう。

生後2年目をとおして、アンナは、昼となく夜となく、しばしば乳房へと気持ちいが向けられました。しかし私の観察時においては、その多くの場合、授乳は母親と赤ちゃんの双方共に落ち着かない、そして時にはひどく悩ましい感情を惹起していたといえます。

下記の観察中に、アンナ(13ヶ月半)は椅子の上によじ登り、それから床へとドスンと転がり落ちております：

ジェニーはここで、まだ悲鳴をあげているアンナを両腕に抱え、まっすぐに椅子へと運ぶ。スウェーターを持ち上げて、<ほらね、お乳を飲みなさい。気分が良くなるから…>と言う。ジェニーは乳首を手を支えて、アンナの口へとそれをあてがった。ちよつとの間彼女は頭を反らしたままで、私の方を怒った真つ赤な顔をして見つめていた。それから彼女は乳首を口へと咥えて、激しく吸った。彼女の自由な方の腕でジェニーのスウェーターをぐいと上の方に持ち上げてようとした。恰も乳房をもつて我がものにしようとしているかのようだった。そして彼女は、足でジェニーの腕やら肩やらを怒ったふう

にど突いたり蹴ったりしていた。彼女が乳首を離れたとき(数分後のことだが)、まだ泣いていた。だがそれから静かになった。ジェニーは抱き位置を替えて、もう一つの方のオッパイを彼女に与えた。だがアンナはそれを受け取ろうとはしない、彼女の泣き声はますます苛立ちを増した。それでまた彼女を抱き替えて、ジェニーは彼女に最初のオッパイを与えた。するとアンナはちょっとまた吸い始めた。同時に、足やら手で尚もジェニーの腕をど突きながら…。

ジェニーは、乳房以外のいかなる方法でも娘を宥めるすべを知らないかのようでした。一方アンナは、身体的言語でもって、乳房に対する葛藤的な感情をありありと表出しています。彼女の上半身は乳房を出来る限り目一杯に貪っていたわけですが、その一方で、下半身の足で彼女は母親を蹴って遠ざけていたのであります。それから、2番目のオッパイが与えられたとき、それを彼女は拒み、だが再び最初のオッパイを受け入れております。それでも尚落ち着かず、葛藤しながら足で母親をど突いていました。ここに、乳房の良い側面と悪しき側面との混乱が覗われます。おそらくは既に述べたところの過剰な分裂ならびに投影同一視がここに示されているものと考えられます。

1歳を過ぎた頃、アンナは固形食を摂り始めました。不規則ながらも興味と喜びを伴いながら…。それにも関わらず、ジェニーは離乳には全然進歩がないとこぼしています。アンナが徐々に彼女が‘準備ができた ready’ときに離乳するだろうというのがジェニーの希望であったと思われる。おそらくは赤ちゃんは、良い対象が内在化され、それが内側で保証と安心の十分な源を与えてくれるときに初めて、乳房を断念する心の準備ができるものといえましょう。しかしながら、分離 separateness が欠如している場合、それは或る程度この母子の関係性を特徴付けているわけですが、そうした内在化のプロセスを促進させることはできません。この互いに‘渾然一体化している’といった状況は、彼らの一緒の生活のあらゆる面に滲み込んでおり、それはアンナが固形食を食べるのを観察するに至ったときでさえもそうなのでした。

下記の観察は、アンナが14ヶ月のときであります。彼女と母親は一緒にランチを食べていました：

ジェニーはアンナと向かい合わせに座っており、彼女のハイチェアに自分のお皿を置いていた。ジェニーがフォークを食べようとして手にすると、アンナがそれを掴み取って、離さない。ジェニーはそのまま彼女にフォークを握らせ、アンナのスプーンを手にした。しかしアンナはジェニーのお皿を自分の方へと引き寄せ、フォークでお皿の中身を取ろうとする。ジェニーは自分の分の食べ物を食べることを諦め、代わりにアンナの分を食べた(小麦の全粒粉のスパゲティと野菜でしたが)。アンナは笑い、そして何やら叫び声をあげた。そして口いっぱいに物をほおばりながら、その合い間にテーブルにフォークを叩きつけていた。

こうした場面において、ジェニーは自分の食事とアンナのそれに制限を加えたり、一線を画することが出来ないようで、その結果がアンナの万能感的な行為となっております。これとまったく同じ意味合い

なのですが、後に同じ日ですが、ジェニーが私に語ったことがあります。アンナの赤ちゃん用ベッドを片付け、ジェニー自身のベッドの脇の床の上に小さなマットレスを置いたんだそうですが、アンナはこれが気に入らず、やはり尚もジェニーと一緒に寝ているということでした。

翌週の観察で再び母親と赤ちゃんとのそれぞれ別々の食べ物へのニーズを巡り、混乱が覗われます。ジェニーがアンナにオッパイを与えようとする事で事態をよりいっそう悪化させていたといえます。

ジェニーは自分用の食事として一切れのパンと大豆の‘チーズ’とを用意していた。アンナはこれを見るや、ジェニーへと近寄った。彼女はアンナを抱き上げ、膝の上に横抱きにして座らせた。アンナはこのパンを掴み取り、どうにかその端っぽを手にした。ジェニーは彼女にくあまり美味しくはないわよ・・・>と言う。アンナはそれを口に咥え、それからポトンと落としてしまう。それでも笑みを浮かべて、まだもう少し食べようとした。ジェニーは床に落ちたパンの切れ端を拾い、それを素早く自分の口へと入れた。<ムムム>と言いながら、舌鼓を打ちながら、笑っている。アンナはジェニーの口を見つめている。なにやら不確かに笑みを浮かべながらも・・・。彼女はそれから、ちょっと哀れっぽいですり泣きをし始めた。徐々にそれは激しさを増してゆく。彼女の顔は赤らんできて、顔をしかめ、いかにも泣き出しそうである。ジェニーはすばやくオッパイを与えようとしたが、アンナは乳首には眼もくれずに、しつこく泣き喚いた。ジェニーは、<どうしちゃったのよ、ダーリン？>とほとほと困ったような顔で尋ねた。アンナは彼女の膝の上でもがき、からだを振るものの、膝から降りようとはしない。

これを観察しながら、私の眼には、アンナにとってほんとうに欲しいものではないものが与えられていると彼女が憤っているのは明らかで、またそれはとても理解できるといった感じなのでした。だがジェニーは、どうやら意図的に、アンナから乳房へ向けての怒りの感情を誘発しようとしているふうに見えました。

離乳を巡るの困難は、アンナが16ヶ月になった頃、その頂点に達しました。ここにその観察記録をご覧くださいますが、この当時の授乳関係の不安に満ちた状況がよく表れております。アンナはジェニーの脚にしがみついております。それから母親が突然からだを移動させたため、アンナは床にパツパツ倒れてしまいます：

ジェニーが床に座ると、アンナはまっすぐに彼女のところへ行き、ジャンパーを引っ張った。ジェニーが膝の上にアンナを抱き上げると、彼女は腕で思い切り母親をど突く動作をし、泣き声を張り上げた。そして振り返って、私の方を見つめる。そしてジェニーへと向きを変え、彼女のジャンパーを持ち上げようとした。ジェニーが左側のオッパイを与えると、アンナは乳首を口へと咥え、その数秒後には頭をのけぞらせ、泣く。彼女は、ジェニーのジャンパーのもう一方の側を引っ張り、同じことをした。彼女は繰り返しオッパイを交互に替え、これを5回か6回か、繰り返した。明らかに欲求不満で焦れて機嫌が悪い。ジェニーは、<これって耐えられないわ>と言い、<アンナにもよくないに決まってる・・・>と付け加える。彼女は、たぶんお乳の味がよくないのか、歯が生えてきているせいで口の中に痛みが

あるせいか、或いは(ちょっと希望的な声音で)もしかして離乳が始まってるんだわと言う。やがてアンナは、右側のオッパイに落ち着き、音を喧しく立てながら吸っている。その間にも左側のおっぱいの乳首を手でいじくっていた。ジェニーの膝の上で身を捻りながら…。彼女は床に足を付けようとしているようだった。立ちしなから、尚も口の中には乳首を咥えられるように…。数分後、彼女は突如オッパイから身を離すと、ジェニーの膝の上から降り、そして玩具箱の方へと行ってしまふ。

ここではアンナにとってどっちのオッパイも大していいものではなくなっているようであります。どちらもその価値が剥奪されており、彼女はどちらにも落ち着いて満足し得ないといったふうでした。たとえ彼女の口は乳首を咥えていたとしても、彼女の下半身はそれから身を引き離そうと躍起になっているといった具合でした。

ジェニーは、アンナが離乳へと準備が出来つつあるのではないかと希望を語っておりますが、娘にある程度の欲求不満に耐えさせることでこのプロセスを促すといったことは無理なようでした。時折にアンナの要求を拒むことで、ジェニーは彼女自身とアンナのどちらにとっても、こうした授乳体験に否も応もなしにしみこんだ苦痛と葛藤に満ちた感情からの解放を考えていたかも知れませんが…。Edna O' Shaughnessy(1964)が指摘していることですが、《不在 absence は、関係性の中のごく自然で基本的な状態であります。もしそれがなければ、どちらにとってもそれぞれのアイデンティティにとって有害となるところの共生 symbiosis になりましょう》と…。彼女は、実際のところ子どもは対象が不在であることを必要としていることを強調しております。《子どもの情緒的成長それ自体は、対象にしがみつこうとする力に拮抗して闘っている》といったわけであります。

アンナが1歳半になろうとしていた頃には授乳関係の事態はいっそう悪化してゆくばかりで、母親そして赤ちゃんのいずれもがそれに対して意味ある変化へ向けて舵取りをしようとは致しません。ジェニーはこの頃、音楽を聴きながら自己催眠を実践する仲間たちにいよいよ没頭して行きます。この時期の幾度か、私の観察中に、眠気を催す音楽のテープが絶えず奏でられており、ジェニーは彼女の眼を閉じ、体を左右に揺らしながら、かなりの時間床に座っていることがありました。時折アンナは母親の腕の中に横たわり、オッパイを吸っていたり、虚空を凝視していたり、いかにも音楽の催眠的効果に影響されているかのようでありました。そして時には、ジェニーが自分に注意を向けてくれないことに耐えられなくなり、何とか母親の瞑想の邪魔をしようと躍起になるときもありました。アンナは今やジェニーに言わせると、‘とてもしがみつが強く、要求がましい子’というわけですから、こんなふうにアンナから彼女自身を切り離す手段として、敢えてジェニーは自らを‘不在’にすることが必要だったように見受けられます。たぶんジェニーは、彼女自身の幼児的な攻撃感情に我慢できなかったのでしょう。だからそれらを‘超越’せんとする企てにおいて、それらは分裂しかつアンナへと投影されるしかなかったものと思われれます。

アンナの生後2年目の後半になった頃には、これまで既に語ってきましたところの‘パターン’が何度

も何度も繰り返される傾向にありました。アンナは、オッパイを喜んでというよりもむしろ欲求不満を感じながら‘遊ぶ play’ことをしておりました。乳首に手を届かすと、もう直にそれからブイッと顔をそむけるのでした。彼女の右側のオッパイへの好みはより顕著となり、彼女はジェニーが左側のオッパイを与えようとすると、泣き叫んで背を向けてしまうのでした。時としてどちらのオッパイも侮蔑的に取り扱われ、そしてアンナは、一つのオッパイからもう一つ別のへと不満足と怒りの叫び声でもって気まぐれに乗り換えるのでした。

総括する前に、ここでもう一つ、アンナが2歳の誕生日を迎える頃の観察記録をご覧ください。ここでは、アンナは1歳10ヶ月でしたが、ひどい風邪を引き、私が訪れたときには母親の膝の上に座っておりました：

アンナは私を一応認めた様子ではあるが、微笑することはなかった。彼女の凝視は焦点が合わず、ぼんやりとしている。ひどい鼻づまりだ。突然彼女はオッパイを求めた。ジェニーが厚着していたので、それらの衣類を脱がせようと躍起になる。<お乳、お乳、お乳(tit tit tit)>と必死な声を発しながら訴えた。ジェニーが彼女の上着を捲り上げた。するとたちまちアンナは背を向けてしまう。それから再び<お乳、お乳・・>と泣き喚く。このとき彼女は数秒ほど乳首に吸いついていたが、またそれから背を向けてしまった。

私は、アンナの2歳の誕生日以降も、ジェニーとアンナを何ヶ月かに一回という不定期の訪問を続けましたが、授乳関係においてはとくに著しい変化は見られませんでした。

ここで私は、私の2年に亘る母子観察について、幾つか回顧的に想いをまとめてみたいと思います。私は、この母親の早期の生育歴についてはほとんど知りません。そして勿論、こうした状況では、ジェニーにその幼少時について尋ねることは適切ではなかったでしょう。しかしながら、彼女はしばしば、子どもの頃に彼女に付き纏っていた困難について言及しております。その結果彼女はある意味、良き母親の慈しみ good mothering を欠いていたと感じていたらしいのは明らかなのです。彼女と彼女の姉妹たちは、オーストラリアのごく辺鄙な地で、彼らの母親とだけ一緒に暮らしていたということです。ジェニーは、母親が子どもたちに対して‘父親的’な役割を果たしていたと感じていたもようです。つまりその意味するところは、親しみと温もりの欠如であると考えられます。ジェニーはしばしば、彼女の母親について侮蔑もしくは怒りでもって語るが多く、その母親がこの国に訪ねてきた折、何度か私は彼女らが一緒にいるところを見ておりますが、母親と娘との間には距離感やら触れ合いの欠如が認められました。その明らかな例の一つは、アンナの最初の誕生日パーティの席で、ジェニーの母親は皆が集う客たちから離れて一人部屋の隅に腰掛け、着ていた外套を脱ごうともせず、そしてアンナのケーキのキャンドルに火が点される前に退出したことも表れております。

ジェニーのおそらく情緒的剥奪の感情、そして‘無価値な worthless’母親との無意識的な同一

視からして、彼女自身の無価値感 *worthlessness* を補償する意味でも是が非でも乳房を理想化する必要があったものと理解されていかも知れません。さらには、彼女の子育てを巡っての‘反伝統的 *alternative*’な信念への頑迷ともいえる固執についていえば、ジェニーは、欲求不満やら分離の苦痛をまったく与えることのない‘理想化された乳房’を与えることで、自分の母親とはまるで違った、より良い母親になろうと懸命になっていたものとも思われるのです。

自ら完璧な母親になろうとする期待感に沿うべく、しくじるまいとするジェニーの自己訓戒の根底には(彼女はしばしば自分を‘悪いママ’として言及しておりましたから)、絶えず負けまいとして張り合っていて、だから攻撃されかつ誹謗中傷された‘内なる対象’といった空想が潜んでいたように覗われます。アンナはまた、あきらかに乳房に対して怒りの感情を懐いています。それは母親が自らの内に抱えきれずにいるものであり、ですからそれを緩和されたかたちで彼女に返してあげることが出来ておりません。このように相互の投影同一視がゆえに、母親と娘は「乳房を攻撃する」という空想において共謀していたと敢えて言ってよろしいかと思われます。

しかしながら、アンナに焦点を合わせて、私の観察を振り返りますと、私は、こうした乳房との危険をはらんだ関係性から生じる不運ともいえる影響にも関わらず、彼女の発達の肯定的な側面に心を打たれます。生まれつきの素質というものがどうやら彼女に味方していると言ってもさしつかえないと考えられます。彼女は誕生時からして、力溢れる、エネルギーで、ちゃんと要求を訴えられる子どもでありました。彼女の母親が言うところではく小さなマダムみたい。自分が欲しいものをちゃんとわかまえているってわけ(*quite a little madam who knows what she wants*)・・>なのです。それも僅かほんの6週目のことだったわけですが・・。お座りも、這い這いも、また歩行も普通の標準より早めでありました。また彼女の象徴的な遊びやら言語的発達も損なわれているようには見られません。

H. Sydney Klein(1985)は、その最近発表された論文のなかで、<逞しい生命力と活力を生まれながらに備わった子どもは、いくらか羨望的 *envious* にはなりにくい。その分、欲求不満にはいくらか不寛容になるであろうが・・>と述べています。もしもアンナが、羨望が優勢的な気質に生まれついていたならば、彼女の早期のパーソナリティの発達は、執拗に完璧であろうとする母親によって表されるところの‘対象’に対しての空想化された攻撃によってひどく低迷したものとなったということはあるでしょう。

しかしながら、どうやら殊更アンナの乳房への羨望がゆえに彼女にとってその良さ *goodness* が損なわれたといったことではなさそうです。問題は、むしろ彼女の母親の理想化 *idealization* といった複雑なプロセスにありそうです。実にその狙いとは、彼女自身の内なる対象の損傷を来たした状態を押し隠し、かつ補償することでありましょう。こうしたパーソナリティの中の不要な *unwanted* 部分を適当なコンテナーに投影するといったことが原始的なニーズとしてあるわけですが、ジェニーにとってそ

れは彼女自身の子どもの誕生で適ったこととなります。つまりは、対象を攻撃し続ける必要がある彼女の自己の一部として子どもが機能することになったというわけであります。その結果として、ジェニーにとって、アンナが自分とは異なる別個の存在であるということを認めるのを極度に困難にしていたということになります。

H. Sydney Klein(1985)は、《子どもの発達能力に対して母親が懐く不安感、実際のところ、母親が子どものフィーリングやら不安感に対しコンテイナーcontainer として行為し得る代わりに、子どもを彼女自身のコンテイナーとして利用しているといった例においてしばしば示される》と語っております。たぶんまたアンナは、母親のありとあらゆるフィーリングやら不安感が絶えず注ぎ込まれていたわけですから、彼女の唯一の対抗手段としては、それを受け入れることを拒むことしかなかったであろうし、それで乳房を侮蔑の対象 an object of contempt にせざるを得なかったということでありましょう。

Prof. Livia di Cagnoは、【タヴィストック・クリニック】(ロンドン)において発表された論文において、赤ちゃんの活気 liveliness という要因が良き母子関係が培かわれる上で至極意義のある点にわれわれの注意を促しております。彼女の3つの問題を含んだ症例の研究から引用しますと、<否定的な要因は、もしも肯定的なそれが優勢である場合にはおそらく十分中和され得ると言えます。われわれはこれら3つの症例に通じるところの或る要因に触れて申し上げますと、それは赤ちゃんの活力・生命力 vitality であります>というわけです。

希望的に申せば、この母親と赤ちゃんにとって、アンナの活気に溢れた気質から生ずる肯定的な発達力が、或る程度ジェニーの抱えるところの、赤ちゃんをそれ自身がそれ自身のものであり、個であるとして関わることの困難といった否定的な影響を軽減することに役立つかも知れません。その一方で、もしアンナが乳房を侮蔑で取り扱うに至っているとしたら、彼女が脱価値化された対象を内在化し、かつそれと同一視しているということでもあり、そこには自尊心の低さ low self-esteem といった感情を認めざるを得ないことになりましょう。

ここで最初に述べましたところの私の悲哀感およびアイロニーに戻りますと、ジェニーの、早期の授乳関係の、それはまた実に出産以前のといってもいいでしょうが、そうした特別な親子の親密度を際限なしに長引かせる企ては結局失敗すべきものであったように思われます。母親の、自分自身にとってもまたアンナにとっても、分離 separation という欲求不満やら苦痛を避けようとする努力の結果が、詰まりのところ、理想化された乳房が彼女の赤ちゃんにとっては侮蔑の対象以外の何ものでもないものになったというわけであります。

112a Nelson Road
London, N8 9RN

※参考文献※

Bick, E. (1968) Notes on Infant Observation in Psycho-Analytic Training.
International Journal Of Psychoanalysis, Vol. 49, pp. 484-486. London.

di Cagno, L.(1984) Early Mother-Baby Relationship, in the light of Mother's Fantasies during pregnancy, circumstances of birth, and inborn capacities of the baby. Paper delivered at the Tavistock Clinic, London.

Klein, H, S. (1985) A Kleinian Point of View.
Journal of Child Psychotherapy. Vol. 11 No. 2, pp. 31-47. London.

Klein, M. (1957) Envy and Gratitude.
In:Vol. 3 Collected Works. London Hogarth.

O'Shaunessey, E. (1964) The Absent Object.
Journal of Child Psychotherapy, Vol. 1. No. 2. London.

Rosenbluth, D. (1965) The Kleinian Theory of Depression.
Journal of Child Psychotherapy. Vol. 1, No. 3, pp. 20-25. London.

《原典; [Idealization and Contempt : Dual Aspects of the Process
of Devaluation of the Breast in a Feeding Relationship]
by Lynda Miller
Journal of Child Psychotherapy, 1987. Vol . 13 No. 1 》
